

令和5年度

講義要項

心理学研究科臨床心理学専攻

修士課程

埼玉学園大学大学院

成績評価について

〔成績評価の方法〕

授業科目毎の成績評価方法は各科目のシラバスに記載されています。評価項目ごとに配点比率が明示されていますので、確認してください。

〔成績評価の内容〕

成績は、「S」「A」「B」「C」「D」と表記されます。このうち「S」「A」「B」「C」は合格です。合格と判定された科目には所定の単位が与えられます。「D」と表記された科目は不合格ですので単位は修得できません。具体的な評価内容は以下のとおりです。

素点	100~90	89~80	79~70	69~51	50~0
成績通知表	S	A	B	C	D
成績証明書(和文)	S	A	B	C	表記しません
成績証明書(英文)	S	A	B	C	表記しません
合否	合格				不合格

※ 令和4年度までの成績評価で、素点が90点以上だったものは「S」として取り扱います。

【重要】 令和6年度より、在学する全学生の成績評価「C」の基準は69~60点に変更されます。

素点	100~90	89~80	79~70	69~60	59~0
成績通知表	S	A	B	C	不可
成績証明書(和文)	S	A	B	C	表記しません
成績証明書(英文)	S	A	B	C	表記しません
合否	合格				不合格

目次

臨床心理学特論Ⅰ [大川 一郎]	1
臨床心理学特論Ⅱ [佐々木美恵]	2
臨床心理面接特論Ⅰ (心理支援に関する理論と実践) [羽鳥 健司]	3
臨床心理面接特論Ⅱ [泉水 紀彦]	4
臨床心理査定演習Ⅰ (心理的アセスメントに関する理論と実践) [佐々木美恵]	5
臨床心理査定演習Ⅱ [伊里 綾子]	6
臨床心理基礎実習Ⅰ [伊里・藤枝]	7
臨床心理基礎実習Ⅱ [佐々木・大川]	8
心理実践実習A [羽鳥・伊里・遠藤・大川・佐々木・佐藤・泉水・中谷・藤枝]	9
心理実践実習B [佐藤・中谷]	10
臨床心理実習Ⅰ (心理実践実習) [泉水・羽鳥]	11
臨床心理実習Ⅱ [中谷・大川]	12
データ解析法特論 [米村 朋子]	13
臨床心理学研究法特論 [佐藤 洋輔]	14
教育心理学特論 (教育分野に関する理論と支援の展開) [藤枝 静暁]	15
発達心理学特論 (教育分野に関する理論と支援の展開) [大川 一郎]	16
人間関係学特論 [古澤 照幸]	17
心身医学特論 (保健医療分野に関する理論と支援の展開) [山本 晴義]	18
精神医学特論 (保健医療分野に関する理論と支援の展開) [柴田 勲]	19
犯罪・非行心理学特論 (司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開) [古曳 牧人]	20
健康心理実践特論 (心の健康教育に関する理論と実践) [遠藤 寛子]	21
心理療法特論 [羽鳥 健司]	22
障害者 (児) 心理学特論 (福祉分野に関する理論と支援の展開) [安崎 文子]	23
学校臨床心理学特論 [中谷 隆子]	24
グループ・アプローチ特論 (家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践) [藤枝 静暁]	25
産業・組織心理学特論 (産業・労働分野に関する理論と支援の展開) [川久保 惇]	26
特別課題研究Ⅰ [大川 一郎]	27
特別課題研究Ⅰ [藤枝 静暁]	28
特別課題研究Ⅰ [安崎 文子]	29
特別課題研究Ⅰ [佐々木美恵]	30
特別課題研究Ⅰ [羽鳥 健司]	31
特別課題研究Ⅰ [古澤 照幸]	32
特別課題研究Ⅰ [遠藤 寛子]	33
特別課題研究Ⅱ [大川 一郎]	34
特別課題研究Ⅱ [藤枝 静暁]	35
特別課題研究Ⅱ [安崎 文子]	36
特別課題研究Ⅱ [佐々木美恵]	37
特別課題研究Ⅱ [羽鳥 健司]	38
特別課題研究Ⅱ [古澤 照幸]	39
特別課題研究Ⅱ [遠藤 寛子]	40

授業概要

心理援助を展開する上で求められる臨床心理学的考え方や知識、技術について学ぶことを目的とする。具体的には、公認心理師法が施行された今、心理専門家として理解すべき臨床心理学の主要な課題やトピックスを取り上げる。また、そこから浮かび上がる臨床心理学に内在する問題点や今日的課題、今後の方向性などの検討を通して、高度な心理専門職者として期待される役割、期待される専門性と倫理、方法論を明らかにし、それらの理解と知識と態度の習得を目指した講義を行う。

授業計画

第1回	ガイダンス：本講義の目的と意義、進め方、到達点について
第2回	臨床心理学の全体像（1）：その成り立ち
第3回	臨床心理学の全体像（2）：系譜
第4回	臨床心理学の全体像（3）：中心となる理論
第5回	心理援助の実際（1）：幼児期・児童期
第6回	心理援助の実際（2）：思春期・青年期
第7回	心理援助の実際（3）：成人（前期—中期）
第8回	心理援助の実際（4）：成人（後期—晩期）
第9回	ミクロの支援とマクロの支援（1）：自助・互助
第10回	ミクロの支援とマクロの支援（2）：共助・公助
第11回	心理援助の理論と技法（1）
第12回	心理援助の理論と技法（2）
第13回	心理専門職に必要な資質と能力
第14回	心理専門職に求められる職業倫理
第15回	授業のまとめ
第16回	試験

到達目標

- (1) 臨床心理学の時代的要請と社会的受容について理解できる。
- (2) 臨床心理学、心理臨床の理論と技法について理解できる。
- (3) 臨床心理士・公認心理師の業務の実際を理解し、その専門性と倫理について理解できる。
- (4) 臨床心理士・公認心理師として心理臨床の実践の独自性について説明できる。
- (5) 心理専門職としての人々の福祉のために活躍・貢献するという高い意識を醸成する。

履修上の注意

- (1) 授業の中で紹介する参考文献等を主体的に自学自習し、問題意識を深めること。
- (2) 授業の中では積極的に発言し、教員との意見交換を行うこと。
- (3) 授業内で行うグループワークに能動的に参加すること。
- (4) 事例等を活用した倫理問題なども扱うので、高いプライバシー保護意識を持って受講すること。

予習・復習

授業に際しては、予習のために事前に講義資料等を配布するので、それを学習した上で授業に臨むことを期待する。

評価方法

成績評価は、リアクションペーパーの内容（20%）、受講態度（10%）、テストの結果（70%）を合わせて、総合的に評価する。

テキスト

授業では、各トピックに沿った資料を配付する予定である。参考書については、授業内で、適宜紹介する。

授業概要

まず、心理面接および心理援助の基本的な考え方や方法、および基礎理論について、主に精神分析的、力動的オリエンテーションに基づいて講義する。次に、心理職が関わる諸問題をトピックとして取り上げ、心理職としての基礎知識、実践上の留意点等を講義する。

授業計画

第1回	心理面接・心理援助の基礎Ⅰ：インテークの方法と留意点
第2回	心理面接・心理援助の基礎Ⅱ：アセスメントと治療契約
第3回	心理面接・心理援助の基礎Ⅲ：治療構造論
第4回	心理面接・心理援助の基礎Ⅳ：病態水準の理解，理論による相違
第5回	心理面接・心理援助の基礎Ⅴ：事例による理解
第6回	アタッチメントの問題：状態像，アセスメント，セラピー
第7回	自閉スペクトラム症：医療的支援，福祉的支援，教育的支援，療育
第8回	ADHD：医療的支援，福祉的支援，教育的支援，療育
第9回	ゲーム依存の問題：病理，治療・対応
第10回	摂食の問題：病理，治療・対応
第11回	統合失調症：病理，治療・対応
第12回	パーソナリティ障害：病理，セラピー，心理面接上の留意点
第13回	アルコールの問題：病理，治療・対応
第14回	認知症：病理，治療・対応，予防
第15回	多職種連携：考え方，各領域（医療，教育，福祉）での実践
第16回	筆記試験

到達目標

1. 精神分析的、力動的オリエンテーションに基づくインテーク、アセスメントおよび治療契約の考え方と方法について説明することができる。
2. 心理面接における治療構造の意味と実践上の留意点について説明することができる。
3. 授業で取り上げた、心理職が関わる諸問題について、心理職による寄与と支援の要点を説明することができる。

履修上の注意

積極的に議論に参加し、授業内容の深化に寄与する姿勢をもつこと。

予習・復習

予習：関連文献にあらかじめ目を通しておく。

復習：授業ノートの振り返りを行う。

評価方法

授業参加態度（積極性、意欲、主体性）30%、担当発表の内容（資料作成、プレゼンテーション、質疑応答）30%、筆記試験40%によって評価する。

テキスト

とくになし。適宜文献を紹介する。

授業概要

心理支援で使用される頻度が高い心理療法の理論と実践について網羅的に学習することを目的とする。本講義では、精神分析および精神分析的な心理療法、行動療法、認知行動療法、来談者中心療法、ゲシュタルト療法、実存主義、交流分析、自律訓練法、サイコドラマ、エンカウンター・グループを取り上げ、それぞれの理論的背景と実践方法について習得する。受講者は各心理療法について事前に研究し、担当箇所の発表を求められる。発表者の発表を基に討議を行い、各療法間の共通点や相違点および、要心理支援者のニーズにどの心理支援法を用いることに最も効果が期待できるのかを見きわめられるようになることを目的とする。

授業計画

第1回	オリエンテーション、心理療法の共通点と相違点
第2回	精神分析および分析心理学 S.フロイド、C.G.ユング
第3回	対象関係論 M.クライン D.W.ウィニコット
第4回	行動療法 H.J.アイゼンク
第5回	行動療法 B.F.スキナー
第6回	行動療法 J.ウォルピ
第7回	認知行動療法 A.ベック
第8回	認知行動療法 A.エリス
第9回	来談者中心療法 C.R.ロジャーズ
第10回	ゲシュタルト療法 F.S.パールズ
第11回	実存主義 V.E.フランクル
第12回	交流分析 E.バーン
第13回	自律訓練法 J.シュルツ
第14回	サイコドラマ J.L.モレノ
第15回	エンカウンター・グループ
第16回	心理療法の統合モデル

到達目標

1. 各心理療法の歴史および理論的背景と実践方法を理解し、説明できる。
2. 要心理支援者のニーズや疾患に応じた心理支援を選択できる。
3. 各心理療法間の異動と心理療法の統合モデルの説明ができる。

履修上の注意

受講者は、各回を分担し、各心理療法の理論と実践方法について事前にレポートを作成して発表する。この発表を基に討議を通して各心理療法の理論を理解する。

評価方法

発表資料、発表、質疑、討議などを総合的に評価する。

テキスト

心理療法の諸システム 金子書房を参考資料として用いることがある。
(事前に購入しておく必要はない)

授業概要

本講義では、臨床心理面接特論Ⅰで学んだ知識をさらに深め、心理支援で用いられる心理療法の知識や手法について講義する。様々な心理療法の中でも、フォーカシング、自律訓練法、マインドフルネス、応用行動分析、プレイセラピー、箱庭療法を取り上げ、それぞれの知識の理解と受講者同士の相互体験を行う。

授業計画

第1回	オリエンテーション
第2回	心理面接の構造と機能
第3回	フォーカシング
第4回	フォーカシング
第5回	自律訓練法
第6回	自律訓練法
第7回	マインドフルネス
第8回	マインドフルネス
第9回	応用行動分析
第10回	応用行動分析
第11回	プレイセラピー
第12回	プレイセラピー
第13回	箱庭療法
第14回	箱庭療法
第15回	まとめ
第16回	レポート

到達目標

1. 各心理療法の歴史および理論的背景と実践方法を理解し、説明できる。
2. 各心理療法を実施する立場を体験し、技法を理解できる。
3. 各心理療法の実践体験に関かれ、体験をシェアすることができる。

履修上の注意

各心理療法を体験的に理解するために、実施者と受ける立場を体験してもらおう。そのため、積極的に講義に参加することが求められる。

予習・復習

予習として、配付された授業資料を読んで理解を深める。復習として、授業で習得した技法を自宅で練習し、次の授業で感想を共有する。

評価方法

受講態度(70%)、レポート課題(30%)で評価する。

テキスト

特に指定しない。講義は配布資料に基づいて進める。参考書はその都度紹介する。

授業概要

心理職における必須の職能である心理的アセスメントについて、①実践における心理的アセスメントの意義、②心理的アセスメントに関する理論と方法、③心理に関する相談、助言、指導等への応用、に沿って指導する。とくに、知能検査の実施、分析、所見書作成、フィードバックの一連の流れについて実践的指導を行う。

授業計画

第1回	心理的アセスメントの各種理論および実践上の意義
第2回	田中ビネー知能検査V①：理論と実施法
第3回	田中ビネー知能検査V②：履修生同士によるテスト体験
第4回	田中ビネー知能検査V③：心理検査報告書作成/個別指導Ⅰ
第5回	田中ビネー知能検査V④：心理検査報告書作成/個別指導Ⅱ
第6回	WISC-IV①：理論と実施法
第7回	WISC-IV②：履修生同士によるテスト体験
第8回	WISC-IV③：心理検査報告書作成/個別指導Ⅰ
第9回	WISC-IV④：心理検査報告書作成/個別指導Ⅱ
第10回	KABC-II①：理論と実施法
第11回	KABC-II②：履修生同士によるテスト体験Ⅰ
第12回	KABC-II③：履修生同士によるテスト体験Ⅱ
第13回	KABC-II④：心理検査報告書作成/個別指導Ⅰ
第14回	KABC-II⑤：心理検査報告書作成/個別指導Ⅱ
第15回	相談、助言、指導における心理的アセスメントの活用：フィードバック

到達目標

1. 心理的アセスメントの実践上の意義について理解し、説明することができる。
2. 各種知能検査の目的と特長を理解し、説明することができる。
3. 各種知能検査を適切に実施することができる。
4. 心理検査報告書の形式を整え、必要な内容を備えて作成することができる。

履修上の注意

あくまでも授業内学習であることに十分配慮し、実質的な知能検査とはならないような工夫をもって指導するが、自らの知能査定に近い体験を伴うことを予め了解のうえ、授業に臨むこと。

予習・復習

予習：関連文献にあらかじめ目を通し、用いる知能検査セットの事前学習を行う。
 復習：授業ノートおよび配布資料の振り返りを行うとともに、各回の課題に取り組む。

評価方法

3種の心理検査報告書の到達度50%、授業参加態度（積極性、意欲、主体性）50%によって評価する。

テキスト

使用しない。関連資料を配布する。

授業概要

本演習では、投映法の心理検査の一つであるロールシャッハ・テストの実施法、スコアリング、解釈を体験的に指導する。まず、受講者は自らが被検者の体験をすることでテストの概要を把握し、テストを受けることが被検者にとってどのような体験となるかについて考察する。そのうえで、テキストを用いてテストの実施法、スコアリングを練習問題に取り組みながら習得する。さらに、架空事例についてスコアリングと解釈を行うことで、臨床実践におけるロールシャッハ・テストの活用法について学ぶ。こうしてテストの実施から解釈までの全体を把握したうえでロールプレイによる検査者体験をし、最後に自身の被検者体験時の結果に基づいて心理検査報告書を作成することで、実践に適用可能な技能と知識を身につけられるよう指導する。

授業計画

第1回	ロールシャッハ・テストの歴史と概要、実施法について
第2回	施行法・スコアリングの種類（反応領域・反応決定因）
第3回	スコアリングの種類（反応決定因・反応内容・形態水準・公共反応）
第4回	スコアリングの基礎知識、実際例2のスコアリング
第5回	実際例2のスコアリング、サマリースコアリングテーブルの作成
第6回	解釈の基礎、反応領域の意味づけ
第7回	反応決定因・反応内容の意味づけ、形式分析についての説明
第8回	継列分析についての説明、実際例2の形式分析
第9回	実際例2の継列分析、実際例2の報告書例についての説明
第10回	受講者データのスコアリング練習1
第11回	受講者データのスコアリング練習2
第12回	ロールプレイによる実施練習
第13回	心理検査報告書作成①：形式分析・継列分析について（個別指導）
第14回	心理検査報告書作成②：報告書の添削（個別指導）
第15回	心理検査報告書作成③：フィードバック用資料の作成（個別指導）

到達目標

- 1.ロールシャッハ・テストの実施法を理解し、実際に実施することができる。
- 2.スコアリングの理論を理解し、Scoring Table を作成することができる。
- 3.解釈についての理論を理解し、テスト結果を解釈することができる。
- 4.テストの結果および解釈を報告書としてまとめることができる。

履修上の注意

心理検査報告書は、受講者自身のテスト結果について作成する。予習には、受講者が被検者の体験をすることも含まれる。あくまでも授業内での課題であることに十分配慮して指導を行うが、結果を個別指導において扱うことを了解のうえ、体験に臨むこと。

予習・復習

- 【予習】被検者の体験，指定された資料の講読，指定された練習問題への回答，報告書の作成
 【復習】資料を読み返す，指定された練習問題への回答，報告書の修正

評価方法

心理検査報告書の完成度（50%），課題やディスカッションに対する取り組み・主体性・積極性（50%）

テキスト

片口安史（監修），「ロールシャッハ・テストの学習 片口法スコアリング入門」，金子書房，ISBN 9784760840083
 その他適宜参考書の紹介，資料の配布を行う。

授業概要

本科目では、体験学習を通して効果的な臨床心理学的支援を行うための基礎的かかわり技術を習得することを目的とする。ロールプレイングを中心にして、非言語的コミュニケーションや言語的なヘルピング・スキルを用いた実践的かかわりについて指導する。また、これらのスキルを目的を持って意図的に用いることができるよう指導する。

授業計画

第1回	オリエンテーション 本科目の目的と意義、内容の構成、到達点、評価について
第2回	現在使用できているスキルの確認
第3回	ロールプレイング①：非言語的コミュニケーション
第4回	ロールプレイング②：かかわりと傾聴
第5回	ロールプレイング③：開かれた質問・言い換え
第6回	ロールプレイング④：感情についての理解を深める
第7回	ロールプレイング⑤：感情（フィーリング）の反映
第8回	ロールプレイング⑥：その他のスキル・スキルの統合に向けたワーク
第9回	ロールプレイング⑦：模擬カウンセリング
第10回	ロールプレイングに基づく医療分野の面接事例の練習
第11回	ロールプレイングに基づく教育分野の面接事例の練習
第12回	ロールプレイングに基づく子どもとの面接事例の練習
第13回	ロールプレイングに基づく保護者との面接事例の練習
第14回	面接技法の最終確認テスト
第15回	授業のまとめと総合評価

到達目標

1. 心理専門職に求められる基礎的かかわり技術について説明することができる。
2. 模擬面接場面においてヘルピング・スキルを効果的に使うことができる。
3. 援助者役割と被援助者役割の相互体験に基づき、援助機能の意味と効果について自らの言葉で説明することができる。

履修上の注意

1. 本科目は、1回の授業を2コマ連続で実施する。
2. 到達目標を達成するために必要となる実習内容および時間を確保するため、欠席や遅刻、早退は原則として認められない。諸般の事情により出席困難な場合は、必ず事前に承諾を得ること。

予習・復習

授業時間内での学習に十分に取り組むこと。

評価方法

かかわり技術の習得度を評価するために面接技術試験を課す。技術水準が評価基準に満たない場合は、追試験を行う。面接技術試験 70%、授業態度 30%とする。なお、臨床心理基礎実習Ⅰの単位が未修得の場合は、臨床心理基礎実習Ⅱは履修できない。

テキスト

授業内容に関連した参考資料を適宜紹介するとともに、ハンドアウト資料を配付する。

【参考図書】（教科書として購入する必要はありません）

- ・書名：ヘルピング・スキル [第2版] 探求・洞察・行動（アクション）のためのこころの援助法
- ・著者名：クララ・E・ヒル著、藤生英行 監訳、岡本吉生・下村英雄・柿井俊昭 訳
- ・出版社名：金子書房
- ・出版年（ISBN）：9784760832590

授業概要

本科目では、「臨床心理基礎実習Ⅰ」に引き続き、心理相談業務に必要な知識の修得と技能の向上を目指して指導する。具体的には、インテーク面接から治療契約までの一連の実践プロセスの方法と留意点、およびケース記録や事例検討資料の作成方法について指導したうえで、さらに発展的に、アセスメントとそれに基づくケースの構造化について実践的な指導を行う。

授業計画

第1回	オリエンテーション
第2回	インテーク面接の方法と留意点①—ロールプレイ：インテーク面接
第3回	インテーク面接の方法と留意点②—ロールプレイ：インテーク面接
第4回	アセスメント面接の方法と留意点①—ロールプレイ：アセスメント面接
第5回	アセスメント面接の方法と留意点②—ロールプレイ：アセスメント面接
第6回	治療契約の方法と留意点①—ロールプレイ：治療契約
第7回	治療契約の方法と留意点②—ロールプレイ：治療契約
第8回	ケース記録の取り方、ケース報告の作成方法①—事例検討
第9回	ケース記録の取り方、ケース報告の作成方法②—事例検討
第10回	アセスメントとケースの構造化①—アセスメントとケースの全体構造
第11回	アセスメントとケースの構造化②—アセスメントにおける心理検査の意味
第12回	アセスメントとケースの構造化③—心理検査の標準化の過程
第13回	アセスメントとケースの構造化④—事例検討
第14回	アセスメントとケースの構造化⑤—事例検討
第15回	まとめ（ふり返り、今後の実習に向けて）

到達目標

1. インテーク面接から治療契約までの一連のプロセスについて、その方法と留意点を理解し、説明することができる。
2. ケース記録を適切に作成し、事例検討資料として整えることができる。
3. アセスメントとケースの構造化について、その方法と留意点を理解し、説明することができる。
4. 事例検討において、臨床心理学ならびに心理療法の理論に基づいて、自らの考えを述べることができる。

履修上の注意

1. 臨床心理基礎実習Ⅰの単位が未修得の場合には、履修は認められない。
2. 本科目は、1回の授業を2コマ連続で実施する。
3. 到達目標を達成するために必要となる実習内容および時間を確保するため、欠席や遅刻、早退は原則として認められない。諸般の事情により出席困難な場合は、必ず事前に承諾を得ること。

予習・復習

授業時間内での学習に十分に取り組むこと。

評価方法

授業への参加態度（主体性、意欲、誠実さ）80%、まとめレポート20%によって評価する。

テキスト

テキストは使用しない。必要な文献は適宜紹介する。

授業概要

本実習では、臨床心理学的援助の基礎的な実践的技能を習得・向上させることを目的とする。具体的には、学内実習施設において、スーパーヴァイザーまたは実習担当者等の下、①実習前に学習するべき記録方法や心構え、②心理支援を要する者へのコミュニケーション、心理検査、心理面接、地域支援、ニーズの把握、支援計画の作成、チームアプローチ等の知識と技能、③公認心理師の職業倫理および法的義務、について指導する。

授業計画

本実習では、学内の実習施設(大学附属臨床心理カウンセリングセンター)において、合計 90 時間以上の実習時間が求められる。

- (1) 包括的事前指導：本実習の内容および全体スケジュールのガイダンス。(2 時間)
- (2) 学内施設実習事前指導：受理面接、カンファレンス資料の作成、ケース担当の心構え、ケース記録等についてガイダンスを行う。(2 時間)
- (3) 受理面接：スーパーヴァイザーによる指導の下、受理面接を担当する。(6 時間以上)
- (4) インテーク・カンファレンス資料作成・発表：受理面接後、スーパーヴァイザーによる指導の下(事前事後打合せ含む)、インテーク・カンファレンス資料およびケース記録を作成する。(5 時間以上)
- (5) 継続的なケース担当：スーパーヴァイザーによる指導(事前事後打合せ含む)の下、継続的に遊戯面接、心理教育面接、臨床心理面接を担当し、ケース記録を作成する。(12 時間以上)
- (6) 心理検査：スーパーヴァイザーによる指導の下、検査面接への心構えについて事前準備した上で、検査面接を担当し、結果の整理および所見書の作成を行う。(5 時間以上)
- (7) 心理検査所見書作成：スーパーヴァイザーより心理検査所見書作成の指導を受ける。なお、ここにはフィードバックを行うための事前事後指導も含む。(5 時間以上)
- (8) ケース・カンファレンス資料作成・発表：担当ケースについて、ケース報告をまとめてカンファレンスにおいて発表する。ケース・カンファレンスでは相談員から指導を受ける。(6.5 時間以上)
- (9) ケース・カンファレンス出席：定期的に関われるケース・カンファレンスに積極的に参加し、他者のケース報告に対して議論し、ケースへの理解を深める。(32.5 時間以上)
- (10) スーパーヴィジョン：定期的にスーパーヴァイザーから指導を受け、臨床心理学的援助に必要な理論および技法を学ぶ。(14 時間以上)

到達目標

1. 心理支援を要する者のニーズを把握し、アセスメントに基づく心理支援の計画を立てることができる。
2. 心理支援を要する者に、適正な手続きによって心理検査を実施し、所見書の作成、およびフィードバックを行うことができる。
3. 公認心理師が遵守するべき職業倫理、法的義務を理解することができる。

履修上の注意

1. 法令で義務付けられた実習時間確保のため、欠席、遅刻、早退は原則として認められない。
2. 実習指導マニュアルを熟読し、実習の基本的な流れと留意事項を理解して実習に臨むこと。
3. 実習記録ノートを用いて自らの実習を随時振り返り、主体的に取り組むこと。

予習・復習

授業時間内での学習に十分に取り組むこと。

評価方法

到達目標と照らして、学内実習施設での取り組み(70%)、スーパーヴィジョンへの取り組み(10%)、カンファレンス発表への取り組み(10%)、カンファレンスへの参加態度(10%)の内容によって総合的に評価する。

テキスト

指定しない。

授業概要

本実習では、臨床心理学的援助の実践的技能を習得することを目的として、福祉分野、司法・犯罪分野、産業・労働分野の学外実習施設において、各施設の実習指導者または実習担当教員等の下で、次の3つの事項について見学・支援実践による実習を指導する。

1. 心理支援を要する者への(1)コミュニケーション、(2)心理検査、(3)心理面接、(4)地域支援、(5)理解とニーズの把握および支援計画の作成、(6) チームアプローチ等の知識と技能の習得
2. 多職種連携および地域連携
3. 公認心理師としての職業倫理および法的義務への理解

そのため、学外実習に出向く際には、実習機関の概要や特徴を理解するための事前指導を行い、また実習後は実習によって何を習得できたのかを確認して今後の臨床活動に活かせるように事後指導を実施する。

授業計画

本実習は、福祉分野、司法・犯罪分野、産業・労働分野における①実習に関する事前指導、②学外施設実習、③事後指導によって構成される。事前指導と事後指導には、公認心理師として身につけておくべき職業倫理や法的知識の指導が含まれる。本実習では、合計で90時間以上の実習時間が求められる。

(1) 包括的事前指導(3時間以上): 本実習の内容、全体のスケジュール、施設の概要、各分野の臨床において公認心理師に求められる役割と実践等について、実習担当教員から説明を受ける。

(2) 学外施設実習事前指導(7.5時間以上): 各分野の現場での実習生の心構え、求められる役割、施設の概要等について実習担当教員から説明を受ける。

(3) 学外施設見学実習(31時間以上): 福祉分野、司法・犯罪分野、産業・労働分野における学外施設の見学実習を行う。

(4) 学外施設実践実習(35時間以上): 福祉分野の学外施設で支援実践実習を行う。毎回、実習後に実習記録を作成し、実習指導者に提出する。定期的に実習指導者と施設担当教員より、実習指導を受ける。

(5) 学外施設実習事後指導(7.5時間以上): 実習担当教員へ実習全体を通して学んだことを報告し、指導を受ける。

(6) 総括的事後指導(6時間以上): 自身の実習内容を振り返り、自身の実習内容を振り返り、学びをまとめ、実習報告会で報告する。実習生同士で学んだことを共有し、実習担当教員から指導を受ける。

到達目標

1. 心理支援の実践を行う施設における管理運営の知識、技能を説明することができる。
2. 心理支援を要する者に対するアセスメントとそれに基づく心理支援の実践的技能を身につけ、実際の心理支援に活かすことができる。
3. 多職種間、地域での連携におけるチームの一員として公認心理師が果たす役割、知識、技能を実践することができる。
4. 公認心理師が遵守すべき職業倫理、法的義務、および現場での実際的な対応を理解し、心理支援を要する者と適切に関わることができる。

履修上の注意

1. 法令で義務付けられた実習時間確保のため、欠席、遅刻、早退は原則として認められない。
2. 実習指導マニュアルを熟読し、実習の基本的な流れと留意事項を理解して実習に臨むこと。
3. 学外施設での実習にあたっては、社会人としての礼節をもって訪問すること。また、実習施設および実習指導者に敬意を払い、指導方針を遵守すること。
4. 実習記録ノートを用いて自らの実習を随時振り返り、主体的に取り組むこと。

予習・復習

授業時間内での学習に十分に取り組むこと。

評価方法

到達目標と照らして、事前指導への取り組み(10%)、学外実習施設における取り組み(70%)、実習記録ノートに基づく事後指導への取り組み(10%)、事後の総括的レポートの内容(10%)によって総合的に評価する。

テキスト

テキストは指定しない。

授業概要

本実習では、臨床心理学的援助の実践的技能を習得することを目的として、学内外の実習施設において、各施設の実習指導者または実習担当者等の下で、次の3つの事項について見学・支援実践による実習を行う。

1. 心理支援を要する者への(1)コミュニケーション、(2)心理検査、(3)心理面接、(4)地域支援、(5)理解とニーズの把握および支援計画の作成、(6)チームアプローチ等の知識と技能の習得
2. 多職種連携および地域連携
3. 公認心理師としての職業倫理および法的義務への理解

なお、学外実習の際には、事前指導を行い、実習によって何を習得できたのかを確認して今後の心理臨床活動に活かせるように事後指導を実施する。学外施設での実習は保健医療、福祉、教育、産業労働、犯罪司法の5分野のうち、保健医療分野を含めた3分野以上の施設にて行う。

授業計画

本実習では、保健医療分野を含めた3分野以上の①実習に関する事前指導、②学内外における実習、③事後指導で構成される。事前指導と事後指導には、公認心理師として身につけておくべき職業倫理や法的知識の指導が含まれる。本実習では、合計で450時間以上の実習時間が求められる。

- (1) 包括的事前指導：本実習の内容、全体のスケジュール、施設の概要、各分野の臨床において公認心理師に求められる役割と実践等について、各実習担当教員から説明を受ける。
- (2) 学内施設実習事前指導：受理面接、カンファレンス資料の作成、ケース担当の心構え、ケース記録作成等についてガイダンスを行う。
- (3) 学内施設実習①：大学附属臨床心理カウンセリングセンターにて電話受付業務を行う。
- (4) 学内施設実習②：(1)～(3)を終えた者から開始する。ケース陪席やケース担当をスーパーヴァイザーの指導の下で担当する。またケース・カンファレンスで全相談員から指導を受ける。
- (5) 学外施設実習事前指導：各分野の現場での実習生の心構え、求められる役割、各施設の概要等について各実習担当教員から説明を受ける。
- (6) 学外施設実習：保健医療分野を含めた3分野以上の施設において実習を行う。その他領域での見学も実施する。
- (7) 学外施設実習事後指導：各施設の実習指導者または各実習担当教員へ実習全体を通して学んだことを報告し、指導を受ける。
- (8) 総括的事後指導：自身の実習内容を振り返り、実習生同士で学んだことを共有し、各担当教員から指導を受ける。

到達目標

1. 心理支援の実践を行う施設における管理運営の知識、技能を習得する。
2. 心理支援を要する者に対するアセスメントとそれに基づく心理支援の実践的技能を習得する。
3. 多職種間、地域での連携におけるチームの一員として公認心理師が果たす役割、知識、技能を習得する。
4. 公認心理師が遵守すべき職業倫理、法的義務、および現場での実際的な対応を習得する。

履修上の注意

1. 本科目は公認心理師資格試験の受験資格に必要な科目である。
2. 法令で義務付けられた実習時間確保のため、欠席、遅刻は原則として認められない。
3. 実習指導マニュアルを熟読し、実習の基本的な流れと留意事項を理解して実習に臨むこと。
4. 学外施設での実習にあたっては、社会人としての礼節をもって訪問すること。また、実習施設および実習指導者に敬意を払い、指導方針を遵守すること。
5. 実習記録ノートを用いて自らの実習を随時振り返り、主体的に取り組むこと。

予習復習

配布されたマニュアルを熟読すると共に、各施設の概要を十分に調べる。漫然と過ごすのではなく目的をもって行動し、その達成度や学んだことを各回の終わりに振り返ること。

評価方法

到達目標と照らして、事前指導への取り組み、学内外実習での取り組み、実習記録ノートに基づく事後指導への取り組み、事後の総括的レポートの内容などによって総合的に評価する。なお、本学附属臨床心理カウンセリングセンター相談研修員A種昇格が単位認定の必要条件である。

テキスト

テキストは指定しない。

授業概要

ケース・カンファレンスでの事例発表に際して、事例発表の留意点、資料作成のポイントを指導し、各ケースにおける発表前事前指導ならびに事後指導を行う。さらに、臨床心理カウンセリングセンターで担当した1事例について、心理面接経過をまとめ、最終レポートとして事例報告あるいは事例研究を提出するにあたり、ケース理解、事例報告(研究)の観点、事例報告(研究)作成について指導する。

授業計画

春期		秋期	
1	臨床心理実習Ⅱの意義	1	事例発表事前指導①
2	事例発表資料の形式	2	事例発表事後指導①
3	事例概要記述のポイント	3	事例発表事前指導②
4	事例概要の記述	4	事例発表事後指導②
5	事例概要の修正	5	事例発表事前指導③
6	心理面接経過の書き方	6	事例発表事後指導③
7	心理面接経過の整理	7	事例報告(研究)の形式
8	心理面接経過の記述	8	事例報告(研究)のポイント
9	心理面接経過の修正	9	事例報告(研究)における事例概要の記述
10	見立て・アセスメントの視点	10	事例報告(研究)における心理面接経過の記述
11	見立て・アセスメントの整理	11	事例報告(研究)における心理面接経過記述の修正①
12	見立て・アセスメントの記述	12	事例報告(研究)における心理面接経過記述の修正②
13	見立て・アセスメントの修正	13	事例報告(研究)における考察の記述①
14	事例発表資料の作成	14	事例報告(研究)における考察記述の修正②
15	事例発表資料の修正	15	事例報告(研究)の発表と指導

到達目標

1. 自己都合による欠席は認められない。諸般の事情により出席困難な場合は、事前に申し出て承諾を得ること。
2. 実習にあたり、指導相談員への相談・報告を怠らないこと。

履修上の注意

1. 自己都合による欠席は認められない。諸般の事情により出席困難な場合は、事前に申し出て承諾を得ること。
2. 実習にあたり、指導相談員への相談・報告を怠らないこと。

評価方法

到達目標と照らし、事例発表資料(40%)、最終レポート(事例報告・事例研究)(40%)、実習指導への取り組み(20%)によって総合的に評価する。

テキスト

特に指定しない。実習過程において適宜資料等を配布する。

授業概要

本科目は、臨床場面で起こる事象への科学的理解と理論的洞察を支えるための研究スキルを身に付けることを目的とし、特に、実証的研究の実施に必要な、得られたデータの解析に使用する統計の知識や様々な分析手法について指導する。具体的には、心理統計法の理論背景(統計的有意性、検定の原理、標本分布など)を学び、適切な心理統計手法を選択および実施するための知識を高める。その上で、主要な統計的手法を用いた研究論文を読んだり、SPSS、HAD および R などに代表される統計ソフトウェアを実際に操作することで、心理学的統計処理を行える実践的スキルを高められるような実習を交えた講義をする。

授業計画

第1回	ガイダンス：データ解析とは
第2回	記述統計の解説と実践
第3回	相関・相関係数の解説と実践
第4回	χ^2 検定・ t 検定の解説と実践
第5回	分散分析の解説
第6回	分散分析の実践
第7回	重回帰分析の解説
第8回	重回帰分析の実践
第9回	因子分析の解説
第10回	因子分析の実践
第11回	共分散構造分析の解説
第12回	共分散構造分析の実習
第13回	カテゴリを扱う多変量解析の解説
第14回	カテゴリを扱う多変量解析の実践
第15回	研究倫理
第16回	レポート課題

到達目標

1. 各心理統計に関する理論背景と方法を理解する。
2. データの特性に応じた適切な分析方法を選択することができる。
3. 統計ソフトウェアを用いて統計処理を行うことができる。

履修上の注意

データ解析にかかわる理論や方法論について、主体的に学ぶ態度をもつこと。

予習・復習

- 予習として、各回の授業で扱う内容について、心理統計の基礎知識を理解しておくこと。指定のテキストの対応箇所を読んでくれることが望ましい。
- 復習として、授業で出された課題を復習し、統計手法の習熟に努めること。

評価方法

到達目標と関連して、授業中の発言などの参加度と理解度(50%)、提出されたレポート内容(50%)などを通して総合的に評価する。

テキスト

小塩真司 (2018) SPSS と Amos による心理・調査データ解析 第3版: 因子分析・共分散構造分析まで 東京図書/ISBN: 978-4-489-02291-3

授業概要

臨床心理学領域においては、客観性を重視する科学的な知見のみならず、事例との相互の交流を通じた「臨床の知」の創出が重要である。本講義では、臨床心理学領域で重要となる様々な方法論や研究法について講義し、先行研究論文のレビューによって批判的かつ論理的に心理学的事象を理解することを目的とする。具体的には、観察法や実験法、調査法といった心理学全般に共通する方法論から、面接法やアセスメント、様々な臨床現場における特徴的な研究法といった臨床心理学領域に特化した方法論などを扱い、臨床的手法を意識したデザインおよび分析法の選択、研究テーマの展開法などについて講義する。

授業計画

第1回	ガイダンス：臨床心理学研究法の目的とその意義
第2回	臨床心理学における研究デザインのあり方
第3回	臨床心理学における基本的な方法論（1）：量的研究
第4回	臨床心理学における基本的な方法論（2）：質的研究
第5回	面接法：臨床的面接法と調査的面接法
第6回	観察法：自然的観察法と実験的観察法
第7回	臨床心理学における実験法
第8回	心理面接と心理療法
第9回	心理アセスメント
第10回	事例研究法
第11回	質的研究法の実際（1）：KJ法（理論編）
第12回	質的研究法の実際（2）：KJ法（実践編）
第13回	質的研究法の実際（3）：グラウンデッド・セオリー・アプローチ（理論編）
第14回	質的研究法の実際（4）：グラウンデッド・セオリー・アプローチ（実践編）
第15回	臨床心理学研究法のまとめと振り返り
第16回	レポート課題

到達目標

1. 心理専門職としての科学者—実践家モデルの重要性を理解し、臨床的視点からの研究計画（目的・方法・分析法）を策定することができる。
2. 臨床心理学において求められる研究の目的とその意義を十分理解して、量的・質的研究法の特徴を踏まえた効果的な利用ができる。
3. 臨床心理学的手法を用いた研究論文を批判的に読みこなす力を身に付け、実践としての心理学的サービスを科学的に評価するために必要とされる研究手法との関連性と意義を深く理解し、事例性と一般化を意識した実践研究者としての態度を身につける。

履修上の注意

ディスカッションでの発言や、講義中に扱った方法論について関連する文献を調べ、発表するなど、授業への積極的な参加が望まれる。

予習・復習

心理学分野の研究法について、基礎的な知識を事前に復習しておくこと。
授業で紹介した方法論について、自身の研究テーマ（修士論文）との関連や適用可能性について振り返りを行うこと。

評価方法

到達目標と関連して、ディスカッションへの参加状況（25%）、発表の準備と成果（25%）、提出されたレポート内容（50%）などから評価する。

テキスト

必要に応じて、適宜資料などを配布する。また、各回のテーマに関連した文献などについても適宜紹介を行う。

授業概要

教育に関わる諸問題について概観すると同時に背景にある原因とそれに対する支援の在り方について理解を深める。具体的には、不登校に関連した話題を中心に、チーム学校、教師の現状、校外機関との連携などの現状を確認すると同時に背景にある教育現場や家庭内に潜む要因について学校現場の実際を紹介しながら講義する。このような取り組みを通して、教育問題についての洞察力を養い、問題の要因を探る能力を高める。そして問題解決に向けて適切な支援を行う実践的能力を身につけることを目指して講義を進める。

授業計画

第1回	教育心理学に関わる諸問題と支援方法の探求
第2回	学校現場の課題とチーム学校としての支援
第3回	小学校における不登校に関する話題 1 コロナ禍前後の不登校状況の変化
第4回	小学校における不登校に関する話題 2 コロナ禍以降の不登校児童への対応の変化
第5回	小学校における不登校に関する話題 3 コロナ禍以降のオンライン登校の様子
第6回	小学校における不登校に関する話題 4 不登校について学校内でできる支援
第7回	小学校における不登校に関する話題 5 不登校児童の家庭との連携、支援
第8回	中学校における不登校に関する話題 1 コロナ禍前後の不登校状況の変化
第9回	中学校における不登校に関する話題 2 コロナ禍以降の不登校児童への対応の変化
第10回	中学校における不登校に関する話題 3 コロナ禍以降のオンライン登校の様子
第11回	中学校における不登校に関する話題 4 不登校について学校内でできる支援
第12回	中学校における不登校に関する話題 5 不登校児童の家庭との連携、支援
第13回	中学校における不登校に関する話題 6 不登校生徒の進学先
第14回	不登校の子どもの学校以外の居場所、支援機関
第15回	不登校とはその子の人生において、どのような意味なのか？
第16回	試験

到達目標

1. 学校現場での心理的支援で求められる理論、技法、チームワークなどを理解することができる。
2. コロナ禍以降の学校現場の現状、起きている問題に関心を持つことができる。
3. 議論を通して、問題の背景について洞察を深めることができる。
4. 問題に対する適切かつ実施可能な支援について議論を通して理解を深めることができる

履修上の注意

コロナ禍以降の学校現場の最新の情報に関心を持ち、文献検索だけでなく、学校見学などを通して、積極的に理解しようとする。また、メディア等により報道されている教育および関連する保育、福祉、子育て領域についても常に関心を持ち、情報収集すること。

予習・復習

各回の授業については事前を目を通し調べておくこと。また、各授業の中で分からないことがある場合はそのままにしておかず、質問して理解を図るように努めること。授業の内容によっては、予習・復習を兼ねてレポートを課すことがある。

評価方法

授業への参加意欲と態度(積極性、発表の姿勢)、レポート、試験などを加味して総合的に評価する。受講生同士が活発な議論をすることを期待します。

テキスト

初回授業で伝える。

授業概要

人の生涯の発達における諸課題に焦点をあてて、発達とは何か、発達の中で生じる困りごとに対してどう理解し、支援していったらいいのかということについて、生涯発達の視点から考えていく。具体的には、日本や世界がおかれている社会状況や課題について理解した上で、生涯発達における困りごとや対応について概観する。その上で、人の発達を支える要因、発達の諸相について理解を深める。さらに、発達の中で適応するという意味について考えていく。

授業計画

第1回	オリエンテーション
第2回	現代日本の社会状況と課題
第3回	発達理解における生涯発達の視点
第4回	生涯発達の中での困りごと
第5回	生涯発達における困りごとへの対応：自助・互助・共助・公助
第6回	人の発達を支えるもの1：遺伝と環境
第7回	人の発達を支えるもの2：身体的要因・精神的要因・心理社会的要因
第8回	発達の諸相1：脳
第9回	発達の諸相2：感情
第10回	発達の諸相3：知的機能
第11回	発達の諸相4：関係性
第12回	発達の諸相5：学力
第13回	発達と適応1：適応すること
第14回	発達と適応2：ライフキャリアということ
第15回	まとめ
第16回	テスト

到達目標

各授業で提供される情報を理解できること。理解した内容について考え、さらにその理解を深められること。その上で、自分なりの視点を持つことができること。

履修上の注意

授業中、適宜、リアクションペーパーに自分の考えをまとめてもらう。また、授業の内容に応じて、グループワークを行うので積極的に参加すること。

予習・復習

講義で扱った内容をさらに深めるため、授業内での資料を読み込み、さらに知りたい内容について自分で調べること。

評価方法

リアクションペーパーの内容(20%)、受講態度(10%)、テストの結果(70%)を合わせて、総合的に評価する。

テキスト

特に指定しない。
随時資料を配布し、参考文献はその都度紹介する。

授業概要

人間関係の発達、生命の誕生に始まり、乳幼児期から老年期の各発達段階における人間関係の様相について、事例やエピソードを含め体験的に理解する。人間関係の形成や心理的援助についてロールプレイングを通じて体験的に学ぶ。

教育・医療・福祉などの各分野における心理職の人間関係の支援について理解する

授業計画

第1回	人間関係の発達、エリクソンの心理社会的発達理論
第2回	エリクソンの心理社会的発達理論
第3回	乳幼児の人間関係のエピソード的理解
第4回	学童期の人間関係のエピソード的理解
第5回	青年期春期の人間関係のエピソード的理解
第6回	青年期秋期の人間関係のエピソード的理解
第7回	成人人間関係のエピソード的理解期の
第8回	職場での人間関係のエピソード的理解
第9回	医療分野における人間関係的支援
第10回	教育分野における人間関係的支援
第11回	福祉分野における人間関係的支援
第12回	人間関係の改善に関する理論(1)
第13回	人間関係の改善に関する理論(2)
第14回	人間関係の改善に関する理論(3)
第15回	被災地における人間関係の支援
第16回	地域社会における人間関係づくり

到達目標

- 1.人間関係学の基礎理論や人間関係の発達の側面を理解する
- 2.人間関係の支援の方法として、グループワークやロールプレイングを通じて人間関係づくりのための支援方法を習得する

履修上の注意

文献学習に加えて、グループワークなど体験的な学習も行うので、積極的な参加が望ましい

評価方法

授業中の態度、レポートの総合的な評価にする

テキスト

適宜資料を配布する。
「人間関係ハンドブック」福村出版

授業概要

臨床心理士やカウンセラーに必要な心身医学の主要な知識について理解を深める。

主要な精神症状と問題行動、精神疾患について講義する。さらに、心身医学と産業精神保健の2テーマについて学習する。講義による知識の習得だけでなく、事例検討を通して、臨床で役立つ実力を養う。心療内科外来診療の陪席実習は、医療の現場を紹介する中で、マンツーマンで実地指導する。毎回、メール相談事例を提出し、回答を考える。カウンセラーとしてのセンスを養うよう講義する。

授業計画

第 1 回	講義ガイダンス メール相談の実際
第 2 回	心身医学と精神医学の関連性
第 3 回	心身医学(1) 心身医学の概念、専門領域の発展
第 4 回	心身医学(2) 心身医学の対象、心身相関のメカニズム
第 5 回	心身医学(3) 心身症における治療法
第 6 回	産業精神保健(1) 職場のメンタルヘルスの現状と課題
第 7 回	産業精神保健(2) 職業性ストレスモデル
第 8 回	心療内科外来陪席実習(1) 精神科と心療内科とメンタルヘルスセンター
第 9 回	心療内科外来陪席実習(2) 気づきとセルフコントロール
第 10 回	心療内科外来陪席実習(3) ライフスタイルとサポーター
第 11 回	心療内科外来陪席実習(4) 全人的医療
第 12 回	心療内科外来陪席実習(5) 治療的自己の形成
第 13 回	心療内科外来陪席実習(6) 勤労者医療(働くことの意味)
第 14 回	心療内科外来陪席実習(7) 予防医療(一次予防、二次予防、三次予防)
第 15 回	まとめ

到達目標

1. 心身医学の中心的な考えについて理解する。
2. ストレス関連疾患に対する病態の把握と具体的な援助技法について説明できる。
3. 産業精神保健におけるストレス理論を理解し、その適切な臨床応用を考えることが出来る。
4. 講義とメール相談、陪席等を通して、臨床心理士として将来役立つ心身医学と産業精神保健の知識と技術を修得する。

履修上の注意

1. 授業の中で何を学んだかを毎回復習レポートで確認するので、目的意識を持って授業に取り組むことを期待する。
2. 毎回提示するメール相談事例への回答を通して臨床的感性を高めることを期待する。

評価方法

1. 授業の中で展開される質疑応答の様子、提出したレポートの内容などから総合的に評価する。
2. 受講生自身のメンタルヘルスに関するセルフケアへの配慮状況も評価の一つとなる。
3. メール相談に対する回答内容を踏まえて、心理的援助者としての実践能力と態度も評価する。

テキスト

参考文献・DVDとして、山本・曾田(共著)「メンタルヘルス対策の本」(労務行政)、桃谷・山本(共著)「心とからだの健康教室」(新興医学出版社)、山本・江花「メンタルヘルス・セルフチェック」(ぎょうせい)、「Dr.山本晴義の実戦!心療内科」(DVD2巻、ケアネット)、山本(監修)「元気な職場をつくるメンタルヘルス」(DVD全10巻、アスパクリエイト)他

授業概要

精神医学における主な精神障害の概念、治療的な面接法、薬物療法など、精神医学全般にわたる講義を行う。それを踏まえて精神医学の中でも臨床上特に重要な位置を占める統合失調症、うつ病、認知症を中心に、実際の臨床場面で患者・家族にどのように接すればよいかという観点から、精神疾患に関する実践的な知識や対応能力が身に付くように講義する。

授業計画

第 1 回	神経系の解剖、情報伝達と機能について
第 2 回	精神障害の概要－診断基準－
第 3 回	精神保健福祉法について
第 4 回	統合失調症の症状と経過
第 5 回	統合失調症の治療
第 6 回	統合失調症の事例検討
第 7 回	うつ病・躁うつ病の症状と経過
第 8 回	うつ病・躁うつ病の治療
第 9 回	認知行動療法の実践
第 10 回	うつ病・躁うつ病の事例検討
第 11 回	認知症の症状と経過
第 12 回	認知症の治療
第 13 回	認知症の事例検討
第 14 回	社会環境の変化と精神疾患の関係について
第 15 回	精神医学特論のまとめ

到達目標

1. 精神医学の中心概念について深く理解する。
2. 精神医学的な面接法や精神療法について深く理解できる。
3. 臨床上特に重要な精神障害についての理解を深め、実践的な対応能力を習得できる。
4. 社会や文化と精神医学の関わりを幅広く理解できる。

履修上の注意

1. 各自が臨床的・実践的な関心や問題意識をもって授業に出席するとともに、関連領域の書籍や論文を自発的に読み進むことが望ましい。
2. 講義に際しては、様々な臨床場面を想定して、実際にどのように患者・家族に対応したらよいかという事例的な検討が頻回になされるので、積極的に参加・発言する姿勢が期待される。

評価方法

到達目標と関連して、授業中の発言などの参加度と理解度(40%)、提出されたレポート内容(60%)などを通して総合的に評価する。

テキスト

DSM5: 精神障害/疾患の診断・統計マニュアル 第5版
講義内容に関連した参考文献や資料をその都度紹介・配布する。

授業概要

司法・犯罪分野において、公認心理師として業務を行うに当たって必要な各種の心理学的理論や研究結果について講義するとともに、アセスメントと心理的支援を中心に、司法・犯罪分野において心理職の実践がどのように行われているかについて講義する。

なお、この科目は、公認心理師試験を受験するために必要な科目である。

授業計画

第1回	司法・犯罪領域における心理学の特徴
第2回	刑事司法制度と犯罪・非行の現状
第3回	司法・犯罪領域における心理職とその役割
第4回	犯罪・非行に関する心理学的理論
第5回	反社会性パーソナリティ障害と素行症
第6回	知能、パーソナリティ特性の査定の実際
第7回	再犯・再非行要因に関する研究
第8回	再犯・再非行のリスクアセスメント
第9回	リスク・ニード・レスポンスビリティ原則
第10回	依存・嗜癖
第11回	リラプス・プリベンションと自助グループ
第12回	動機付け面接法
第13回	刑事施設・少年院における指導・教育の実際
第14回	犯罪被害者の心理
第15回	犯罪被害者に対する支援
第16回	期末レポート

到達目標

- 1 公認心理師として、司法・犯罪の分野で業務を行う上で必要な知識を身に付ける。
- 2 司法・犯罪領域における心理職の実践を理解する。

履修上の注意

疑問点があれば積極的に質問するなど、授業に積極的に参加することを期待する。

予習・復習

授業で紹介した資料、文献、参考図書等を用いて、特に復習に努めること。

評価方法

レポートの内容 70%、授業における積極性 30%の割合を基本として、総合的に評価する。

テキスト

テキストは指定しない。資料は必要に応じて配付する。

参考図書：

「司法矯正・犯罪心理学特論—司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開—」 橋本和明

NHK 出版 2020年 ISBN: 978-4595141317

「犯罪心理学事典」 日本犯罪心理学会編 丸善出版 2016年 ISBN: 978-4621089552

授業概要

心身の健康に関する心理学的な支援方法について修得できるよう講義する。具体的には、健康心理学の歴史を概観し、ストレスマネジメントに代表される心の健康を維持する心理教育的支援の理論の理解を目指すため、実践を通して講義する。また、感情ならびにパーソナリティについての理解につながるよう、心身の健康に関する心理教育と理論と方法を紹介する。

授業計画

第1回	オリエンテーション
第2回	健康心理学の歴史
第3回	ストレスとは何か
第4回	対処行動、認知面へのアプローチ
第5回	ソーシャルサポートと健康
第6回	自己開示と健康
第7回	パーソナリティと健康
第8回	感情と健康：感情の役割
第9回	急性ストレス・災害からの回復支援
第10回	生活習慣の改善の支援
第11回	職場の健康リスク
第12回	健康増進を促す様々な心理療法
第13回	自殺対策への支援
第14回	マインドフルネス
第15回	セルフ・コンパッション
第16回	レポート課題

到達目標

1. 健康心理学に関する理論を説明できる。
2. 心身の健康教育に関する実際の方法を理解できる。

履修上の注意

1. 本講義は公認心理師資格の指定科目である。
2. 体験を通じた理解を行ってもらうため、積極的な関与を求める。

予習・復習

参考図書等を紹介するので、各自で発展的な学習を進めることを期待する。

評価方法

到達目標と関連して、授業中の発言などの参加度と理解度(30%)、提出されたレポート内容(70%)などを通して総合的に評価する。

テキスト

講義にて適宜紹介する。

授業概要

心理療法の技法には様々なものがあるが、中でも欧米では認知行動療法が最も広く知られている。日本でも認知行動療法は注目されてきており、様々な疾患や生活習慣等に対して高い効果があるという多くのエビデンスが示されている。本講義では、認知行動療法の基本的な考え方や、実施するために必要な実践的な基礎的スキルの習得を目的とする。

授業計画

第1回	ガイダンス
第2回	認知行動療法で扱う「心」の要素
第3回	治療的援助の順序
第4回	共感技法
第5回	情報を得るための質問技法と誘導するための質問技法
第6回	自動思考、条件信念、中核信念
第7回	心理教育
第8回	事例定式化
第9回	目標設定
第10回	週間活動記録と個人実験
第11回	問題解決技法
第12回	階層表の作り方
第13回	認知再構成
第14回	全技法を使ったロールプレイ
第15回	まとめ
第16回	レポート

履修上の注意

ガイダンスに出席しなかった場合は受講を認めない。また、ガイダンスの時に伝える約束事を必ず守る事。自己都合による欠席、または無断欠席のいずれかが一度でもあった場合は、それ以降の受講を認めない。

評価方法

授業内での理解度、参加度、提出されたレポート内容等によって総合的に評価する。

テキスト

資料を配布する。

授業概要

本講義では、学部で既習の「障害者（児）心理学」を基に、「公認心理師」として支援を行う上で必要な知識を発展させていく。障害の分類である身体障害、知的障害、精神障害、難病による障害のそれぞれについて理解を深め、更にその支援方法について講義をする。それぞれの障害への知識や理解を深め、公認心理師として適切なアセスメントについて講義を行う。更に、症例を紹介し、それぞれの症例に、公認心理師として適切に必要な支援法や配慮について討論をしつつ考えていく。

授業計画

第1回	ガイダンス 履修にあたっての諸注意
第2回	障害の分類、福祉と障害に関する法律
第3回	障害の受容
第4回	視覚障害
第5回	聴覚障害
第6回	音声言語障害と言語発達の問題
第7回	高次脳機能障害と脳機能に関する検査
第8回	知的障害と各種知能検査
第9回	自閉スペクトラム症とスクリーニング検査
第10回	学習障害とスクリーニング検査
第11回	注意欠如多動性障害
第12回	情緒障害と選択制緘黙
第13回	精神障害とリワークプログラム
第14回	健康障害と難病
第15回	肢体不自由と運動障害
第16回	期末試験

到達目標

1. 各障害の定義を理解し、症状や障害の様相を説明できる。
2. 各障害に対応した適切なアセスメント方法を理解し、説明できる。
3. これまでに行われてきた障害に応じた支援方法を説明できる。
4. 各症例に応じた新たな問題から心理学的支援方法を提案する。

履修上の注意

1. 既に履修した障害児（者）心理学（障害者・障害児心理学）について理解していること
2. 各障害について、毎回、障害の特性に応じた支援法を考え発表してもらうので、積極的な参加が望まれる

予習・復習

指定された講義資料は予め読んでおくこと
毎回の講義内容を確認し、復習を各自進めること
講義で紹介された参考文献をできるだけ読み進めること

評価方法

期末試験 50%、授業態度 20%、レポート課題 30%にて総合的に評価する

テキスト

特に指定はしない。必要に応じ適宜、参考資料を紹介、配布する

授業概要

学校臨床心理学とは、学校という場において展開される臨床心理学的支援に関する知識・技術体系のことをいいます。本授業では、スクールカウンセリングの観点を軸とし、子ども・保護者・教師が学校教育過程で出会う様々な問題への心理臨床学的援助に関する基本的な知識や技術を概説します。次に、各テーマに沿った最新の学術研究・文献購読及び事例検討を行い、現代の学校を取り巻く問題やその援助の実際について理解を深め、実践的技能を高めることができるよう進めます。

授業計画

第1回	オリエンテーション ～授業の目的と進め方の説明～
第2回	学校臨床心理学とは ～学校という場での臨床心理学的援助，意義と課題～
第3回	スクールカウンセリングの概要① ～歴史と実際，3段階の援助サービス～
第4回	スクールカウンセリングの概要② ～チーム学校，アセスメントと援助の過程～
第5回	スクールカウンセリングの概要③ ～学校を取り巻く諸問題～
第6回	発達障害への理解と支援の実際① ～文献購読～
第7回	発達障害への理解と支援の実際② ～発表と討論～
第8回	不登校への理解と支援の実際① ～文献購読～
第9回	不登校への理解と支援の実際② ～発表と討論～
第10回	いじめへの理解と支援の実際① ～文献購読～
第11回	いじめへの理解と支援の実際② ～発表と討論～
第12回	非行への理解と支援の実際① ～文献購読～
第13回	非行への理解と支援の実際② ～発表と討論～
第14回	虐待への理解と支援の実際① ～文献購読～
第15回	虐待への理解と支援の実際② ～発表と討論～
第16回	まとめ

到達目標

到達目標は、以下の2点とします。

- ①現代の学校を取り巻く諸問題への理解と臨床心理学的支援の実際について理解を深め、説明できること
- ②諸問題に対する見立てや支援計画について、各受講生及び教員と積極的にコミュニケーションをとりながら検討することにより、チームアプローチの実際について体得すること

履修上の注意

本講義では、以下の点にご留意ください。

- ・授業への大幅な遅刻や早退は欠席とみなすことがあります
- ・他の受講生が授業を受ける権利を奪う行為を禁止します
- ・主にグループワークや討論によって授業が進みますので、主体的・積極的な参加態度が求められます。
- ・学校を取り巻く諸問題の支援者として、多角的な視点や技術を獲得する意欲があること
- ・毎回の講義後にリアクションペーパーを提出して頂きます

予習・復習

授業で配布される資料や検索した文献・参考図書・視覚教材を用いることはもちろん、授業中に行ったグループワークや討論によって得た体験を振り返ることによって、予習・復習を主体的に行い、学びを深めること。授業中に取り扱ったテーマや学校教育全般に関連する最新ニュース及びご自身の体験に関心を向けること。

評価方法

授業参加態度（20%），リアクションペーパー（30%），期末レポートや試験（50%）によって評価する。

テキスト

特に指定しません。適宜授業中に参考図書を紹介します。

授業概要

本授業の目標は、心理専門職者が行うグループ・アプローチがどのようなものであるかについて理解することである。新たに誕生した国家資格「公認心理師」がどのような分野で、どのようなグループに対して支援や援助を行うのかについて、具体例を取り上げながら講義する。具体的には、①深刻な病にある者、精神障害者、不登校児童生徒、育児不安と産後鬱病を患っている母親などとその家族における家族内のグループダイナミクスに焦点をあてた心理支援、②引きこもり、認知症などを患っている高齢者など地域に基づいた支援が必要な人たちへの心理的援助のあり方、③地域の学校や保育所、施設などに勤めている教職員への心理的援助などを取り上げる。授業では、テキストや資料の解説の他に、集団討論やロールプレイなどを行いながら、より実践的に学びを深めていく。

授業計画

第1回	ガイダンス：授業の方針と受講者の心得について
第2回	講義：グループ・アプローチの歴史と現状
第3回	講義：不登校の子どもとその家族を対象としたグループ・アプローチの実際と課題
第4回	講義：貧困、経済的課題のある家族へのグループ・アプローチの実際と課題
第5回	講義：認知症などを患う高齢者とその家族へのグループ・アプローチの実際と課題
第6回	講義：地域における子育て支援を目的としたグループ・アプローチの実際と課題
第7回	講義：産後鬱の予防と回復を目的としたグループ・アプローチの実際と課題
第8回	講義：教師や保育者の支援を目的としたグループ・アプローチの実際と課題
第9回	講義：グループ・アプローチの技法①構成的グループ・エンカウターの理論
第10回	演習：グループ・アプローチの技法①構成的グループ・エンカウターの演習
第11回	講義：グループ・アプローチの技法②ソーシャルスキルトレーニングの理論
第12回	演習：グループ・アプローチの技法②ソーシャルスキルトレーニングの演習
第13回	講義：グループ・アプローチの技法③ピアサポートの理論
第14回	演習：グループ・アプローチの技法③ピアサポートの演習
第15回	全体のふり返りと質疑応答
第16回	期末試験

履修上の注意

1. 本授業は公認心理師を目指す場合の必須科目です。
2. 授業ではグループ・アプローチの事例等を取り上げます。その際、倫理上の配慮が発生しますので、受講者はしっかりとプライバシー保護の意識をもって受講に臨んでください。

評価方法

成績評価は、学期末試験 50%、授業内課題 30%、演習への参加態度 20%とします。

テキスト

高松 里(編集) サポートグループの実際と展開をテキストとして使用する予定です。
初回授業で指示します。

授業概要

近年、産業・組織領域において心理専門職の需要が高まっている。産業・組織心理臨床とは働く全ての人を対象として、人が働くことに伴うさまざまな問題を整理し、その解決を支援していくことである。働くことを支援するということは、その人の人生そのものを支援することにつながるため、幅広い視点が求められる。

本講義では産業・組織心理学に関する最新の論文の輪読を受講生全員で行う。講義とディスカッションを通じて、産業・組織心理に関する研究や実践を行う上で必要な考え方、高度な専門的知見、ならびに研究スキルについて指導する。

授業計画

第1回	授業ガイダンス：産業・組織における「心理学」の意義
第2回	メンタルヘルス対策の動向：労働衛生法規と指針
第3回	産業ストレス概論
第4回	勤労者が陥りやすい精神疾患：うつ病、適応障害
第5回	産業労働分野の業務
第6回	EAP 概論
第7回	論文輪読 1
第8回	論文輪読 2
第9回	論文輪読 3
第10回	論文輪読 4
第11回	論文輪読 5
第12回	論文輪読 6
第13回	論文輪読 7
第14回	論文輪読 8
第15回	授業ガイダンス：産業・組織における「心理学」の意義

到達目標

1. 産業・労働分野における法規や産業保健の施策について理解する。
2. 産業・労働分野における個人・組織への心理的支援に関する実践的な知識を習得する。
3. 産業・組織心理学、臨床心理学の視点からの知見を実際の支援に結びつけることができる。

履修上の注意

1. 配布資料や授業の中で紹介する参考文献を用いて主体的に学習し、問題意識を深めること。
2. 講義に際しては積極的に発言し、受講生同士の相互理解に務めること。
3. 各自の発表回では、事前準備をきちんと行った上で発表に臨むこと。

予習・復習

各回の授業で扱う内容について、事前に調べておくことが望ましい。論文輪読では、自分の発表回以外においても対象論文を事前に熟読しておくこと。

評価方法

授業への関与度（50%）、担当回の発表内容（50%）により総合的に評価する。

テキスト

授業時に、資料を毎回配布する。参考文献については適宜紹介する。

授業概要

指導学生のテーマに沿って、修士論文作成に求められる研究スキルの習得を図る。具体的には、文献検索能力と文献レビュー能力の開発、研究課題に関連する最新の専門知識及び研究方法の習得である。

春期では、構想発表会に向けての研究テーマの絞り込みとプレゼンテーション・スキルの習得、研究計画の実施に向けた討論などを行う。秋期では、春期での成果を踏まえて、各自の研究テーマを深め、中間発表に向けての研究計画の吟味と予備調査、本調査に向けての準備、実施、データの分析と考察、文献レビューの補強など、2年次の修士論文の完成に向けた指導を行う。

授業計画

<前期>		<後期>	
1	修士論文作成プロセスに関するガイダンス	1	春期の振り返りと秋期の達成目標の確認
2	2年間のカリキュラムの進め方について	2	研究計画の発表(1):構想の検討
3	1年次の取組みと達成目標について	3	研究計画の発表(2):構想発表の予行演習
4	研究課題の発表(1)問題点の吟味	4	構想発表会事後指導:問題点の振り返り
5	研究課題の発表(2)課題の絞り込み	5	研究計画の吟味(1):概念モデルの再検討
6	研究課題に関する文献検索	6	研究計画の吟味(2):分析モデルの検討
7	データベースの利用法、検索法を学ぶ	7	研究計画の吟味(3):分析モデルの再検討
8	先行研究論文の発表と討論(1)	8	予備調査の設計(1):調査票の作成
9	先行研究論文の発表と討論(2)	9	予備調査の設計(2):対象・方法の確認
10	先行研究論文の発表と討論(3)	10	予備調査の設計(3):実施準備
11	研究の進捗状況の確認(1)	11	予備調査の設計(4):調査実施
12	研究の進捗状況の確認(2)	12	予備調査の結果分析(1):データ吟味
13	研究の進捗状況の確認(3)	13	予備調査の結果分析(2):結果分析
14	研究テーマの吟味	14	本調査に向けた問題点の整理(1)
15	春期のまとめ	15	本調査に向けた問題点の整理(2)

到達目標

- (1) 各自の研究テーマに即した文献検索が適切にできる。
- (2) 各自の研究テーマを内外の先行研究と関連づけて、深めることができる。
- (3) 各自の研究テーマに即した方法論を展開できる。
- (4) 各自の研究テーマに即した研究計画を作成、実施することができる。
- (5) 各自の研究テーマについて、簡潔明瞭にプレゼンテーションを行うことができる。

履修上の注意

学術的意義とともに、人々の福祉に貢献するという問題意識を持って、主体的に研究に取り組むことが求められる。

特別課題研究は、2年にわたる修士論文完成を最終目標としている。そのためには日々の着実な課題への取り組みが必要であるが、そのためにも日々の心身の健康に留意することが求められる。

予習・復習

予定される課題を確実に仕上げ、終了後は、授業内容を反復し、修正を行うこと。

評価方法

研究テーマの完成度だけでなく、そこに至る主体的な取り組みとその内容について評価する。

テキスト

研究内容、研究の進捗状況に応じて適宜紹介する。

授業概要

今日における心理臨床を中心とした課題を概観し、自分の興味関心を広げるとともに、問題の所在と研究テーマを明らかにする。研究テーマに則した研究計画および研究方法を立案する。そのために、国内外の先行研究の収集、先行研究のレビューを通じてこれまでの成果と今後の課題の明確化、研究上の倫理的配慮などへの理解を深める。

中間発表に向けて、先行研究のレビューの増強、研究計画と研究方法の精度の向上、必要に応じて予備的研究を実施する。全員が発表と討論に参加し、プレゼンテーション力やクリティカルな読解力や思考力を獲得できるよう指導する。

授業計画

到達目標

1. 研究テーマに即した文献検索が適切にできる。
2. 先行研究の成果と課題を踏まえて、研究テーマを明確化させることができる。
3. 研究テーマに沿った研究計画および研究方法を確立することができる。
4. 研究テーマに沿った論文作成能力を獲得することができる。

＜春期＞		＜秋期＞	
1	修士論文作成に関する総合ガイダンス	1	第1回 秋期ガイダンスと秋期の達成目標について
2	2年間のカリキュラムと見通しについて	2	アンケート調査の実施、被験者への依頼などにおける倫理的配慮と注意点
3	1年次の見通しと達成目標について	3	研究目的の立案①：予備的検討
4	研究テーマの立案①：教育分野に関する最近の課題と心理臨床の貢献	4	研究目的の立案②：問題と目的の明確化
5	研究テーマの立案②：福祉分野に関する最近の課題と心理臨床の貢献	5	研究方法の立案①：既存の概念モデルの提示
6	研究テーマの立案③：医療分野に関する最近の課題と心理臨床の貢献	6	研究方法の立案②：研究方法の検討
7	論文検索データベースの利用方法、論文検索方法を学ぶ	7	研究方法の立案③：仮説と分析方法の検討
8	研究テーマに関わる学術論文の検索と収集①：日本語文献を中心に	8	研究方法の立案④：倫理的検討
9	研究テーマに関わる学術論文の検索と収集②：英語文献を中心に	9	予備調査の依頼対象、依頼方法、調査内容の発表と検討
10	教育分野に関連した先行研究の発表と討論	10	予備調査の依頼対象、依頼方法、調査内容の確認
11	福祉分野に関連した先行研究の発表と討論	11	予備調査の実施
12	医療分野に関連した先行研究の発表と討論	12	予備調査の結果回収と分析
13	研究テーマの絞り込み	13	予備調査結果の検討
14	研究を行う上での倫理的配慮	14	予備調査で得られた成果のまとめ
15	春期のまとめと研究進捗状況の確認	15	第1回中間発表にむけた研究計画の吟味と修正

履修上の注意

学術的な意義および教育・福祉・医療の臨床現場における実践力を向上させることを念頭に置きながら主体的かつ意欲的に研究に取り組むこと。

評価方法

課題への主体的取り組みとその内容について評価する。

テキスト

研究内容、研究の進捗状況に応じて紹介する。

授業概要

研究論文作成に必要な技能を習得する。研究テーマに関する国内外の文献を検索し、関連分野の内容の理解を深め、先行研究をレビューする。その経過で、自身の研究テーマの問題点を絞り、研究構想を練り、研究計画を立案していく。

春期では、研究テーマを絞り込み具体化するために、先行研究を精読し、課題を討論、プレゼンテーションを行う。

秋期には、春期の成果をもとに、中間発表に向けて、研究テーマを深め、予備実験・調査に向けて準備・実施、データの分析を進める。こうした中で、更に適切で妥当な研究計画へと練り上げ、倫理審査資料を作成し、修士論文の完成に向けた指導を進める

授業計画

<前期>		<後期>	
1	修士論文作成に関するガイダンス	1	秋期ガイダンス
2	2年間のカリキュラムと進め方について	2	研究実施に関する倫理的配慮について
3	1年時の見通し・目標設定	3	研究デザイン立案① 構想の発表
4	研究課題の発表と確認	4	研究デザイン立案② 問題点の明確化
5	研究課題の絞り込み	5	研究デザイン立案③ 概念モデルの検討
6	先行研究の発表と討論①	6	研究デザイン立案④ 分析方法の検討
7	先行研究の発表と討論②	7	研究デザイン発表・検討①
8	先行研究の発表と討論③	8	研究デザイン発表・検討②
9	先行研究の発表と討論④	9	予備実験・調査の実施①
10	先行研究の発表と討論⑤	10	予備実験・調査の実施②
11	先行研究の整理①	11	予備実験・調査の分析①
12	先行研究の整理②	12	予備実験・調査の分析②
13	研究課題の具体化と討論①	13	予備実験・調査の発表と問題点の整理
14	研究課題の具体化と討論②	14	本実験・調査に向けた問題点の整理
15	春期のまとめ	15	倫理委員会資料の作成

到達目標

1. 研究テーマに即した国内外の文献検索が適切にできる。
2. 先行研究に関連づけて、研究テーマを深めることができる。
3. 研究テーマに即した研究方法を論理的に立案・実施できる。
4. 研究テーマについて、簡潔・適切にプレゼンテーションできる。
5. 倫理審査の資料を作成できる。

履修上の注意

研究としての学術的意義を探求し、更に人間や社会にどれだけ還元できるか考え、積極的・主体的に取り組むこと。

予習・復習

毎回の授業で発表する資料について、関連する国内外の文献を検索し確認しておく。

発表後は、問題点を再検討し、整理しておく。

評価方法

授業態度 20%、修士論文完成に向けて先行文献を検索し整理したレポート 40%、予備実験・調査の分析結果報告のレポート 40%にて総合的に評価する。

テキスト

特に指定しない。研究テーマに沿った内容の文献を絶えず検索読んでおく。

授業概要

修士論文作成に向けて、次のステップに沿って指導する。(1) 研究課題に基づいて先行研究をレビューし、研究課題の具体化を図る。(2) 先行研究のレビューを進めながら、自らの研究の位置づけを図り、実行可能な研究デザイン立案を行う。(3) 研究デザインの具体化を図り、必要に応じて予備調査、あるいは予備的研究を実施する。(4) 予備的検討を踏まえて、本調査の準備を進める。

また、春期の構想発表会、および秋期の第1回中間報告会の事前・事後指導を行う。

授業計画

<春期>		<秋期>	
1	研究課題についての討論	1	研究デザインの構想⑤
2	研究課題の具体化/先行研究レビュー①	2	研究デザインの構想⑥
3	研究課題の具体化/先行研究レビュー②	3	研究デザインの構想⑦
4	研究課題の具体化/先行研究レビュー③	4	研究デザインの構想⑧
5	研究課題の具体化/先行研究レビュー④	5	研究デザインの立案①
6	研究課題の具体化/先行研究レビュー⑤	6	研究デザインの立案②
7	研究課題の具体化/先行研究レビュー⑥	7	研究デザインの立案③
8	研究課題の具体化/先行研究レビュー⑦	8	研究デザインの立案④
9	研究課題の具体化/先行研究レビュー⑧	9	研究デザインの立案⑤
10	研究課題の具体化/先行研究レビュー⑨	10	予備調査・予備的研究準備①
11	研究課題の具体化/先行研究レビュー⑩	11	予備調査・予備的研究準備②
12	研究デザインの構想①	12	予備調査・予備的研究準備③
13	研究デザインの構想②	13	予備調査・予備的研究実施/データ分析①
14	研究デザインの構想③	14	予備調査・予備的研究実施/データ分析②
15	研究デザインの構想④	15	予備調査・予備的研究実施/データ分析③

到達目標

1. 研究課題を明確化し、先行研究のなかに位置づけることができる。
2. 実行可能な研究デザインを立案することができる。
3. 適正な手続きに基づいて、予備調査・予備的研究を実行することができる。

履修上の注意

自ら主体的、積極的に取り組むこと。

予習・復習

予習：疑問点・討論点を整理する。
復習：授業内での指導を踏まえて研究を進める。

評価方法

研究デザイン立案の到達度によって評価する。

テキスト

テキストは使用しない。必要な文献は適宜紹介する。

授業概要

明らかにしたい臨床心理学的な現象を特定し、おおまかな研究テーマを決定できるように指導する。次に、関連する最新の先行研究をレビューし、研究テーマとの関係性を検討させる。さらに、議論を通して詳細な研究テーマを決定し、測定や分析の方法も含めて、研究全体の計画を立て、予備調査を実施するよう指導する。その後も、引き続き、必要な先行研究のレビューを行い、指導する。

授業計画

到達目標

1. 究みたい現象を臨床心理学的に位置づける能力を身につける。
2. 研究テーマに関連する先行研究を検索し、研究テーマとの異動を検討することができる。
3. 研究テーマを表現するための方法論を身につける。
4. 研究テーマを論理的に論述し、論文を作成することができる。
5. 研究テーマをプレゼンテーションすることができる。

<春期>		<秋期>	
1	修士論文作成の概要	1	授業のガイダンスと秋期の到達目標の説明
2	修士論文完成までの見通しについて	2	研究の実施に関連する倫理的配慮について
3	1年次の到達目標に関する説明	3	研究計画の発表(1): 到達点の確認
4	各自の研究テーマの発表(1):	4	研究計画の発表(2): 問題点の検討
5	各自の研究テーマの発表(2): テーマの絞り込み	5	研究計画の発表(3): 研究目的について
6	先行研究の検索方法を学習する。	6	研究計画の発表(4): 方法論について
7	各自のテーマに関連する先行研究の検討(1): 歴史的に重要な文献を中心に	7	研究計画の発表(5): 概念モデルの検討
8	各自のテーマに関連する先行研究の検討(2): 最新の研究を中心に	8	研究計画の発表(6): 実験計画の策定
9	先行研究と各自のテーマとの関連について(1): 相違点の検討	9	研究計画の発表(7): 分析方法の検討
10	先行研究と各自のテーマとの関連について(2): 類似点の検討	10	研究計画の発表(8): 予備データ取得の依頼と回収
11	研究の進捗状況確認(1): 研究テーマの吟味	11	予備調査の実施と結果の発表(1): 取得した予備データの検討と入力
12	研究の進捗状況確認(2): 研究テーマの修正	12	予備調査の実施と結果の発表(2): 予備分析結果の発表
13	研究の進捗状況確認(3): 研究テーマの確認	13	中間発表にむけて(1): デザイン修正個所の確認
14	研究テーマの絞り込み	14	中間発表にむけて(2): デザインの修正
15	春期のまとめ	15	秋期のまとめ

履修上の注意

各自の関心のみに基づいた研究を行うのではなく、実施する研究の学術的および社会的意義がどのようなものなのかを常に意識し、研究参加者の利益が守られるよう謙虚な姿勢で研究に取り組むことが求められる。

評価方法

研究課題への積極的な取り組み、およびその内容について評価する。

テキスト

適宜紹介する

授業概要

人間の社会的行動に影響を与える諸要因を探り出し、理解を深め、研究を進めるための関係文献を紹介する。文献をもとにしつつ、議論を通して諸要因を確認しつつ、論文作成の方向性を確定する。テーマは教育、福祉、医療を含む社会的行動に関わるものとし、社会心理学的方法による研究を中心とする。中間発表に向け、研究計画を検討し、予備調査を実施することにより、課題を発見し、妥当な研究計画の作成を行っていきけるように指導する。

授業計画

到達目標

1. 研究テーマから適切な課題を導き出せる。
2. 研究テーマに適合する文献検索、収集ができる。
3. 先行研究を研究テーマのために利用し、研究テーマを深めることができる。
4. 研究テーマや予備調査の方法・結果を効果的にプレゼンテーションすることができる。

＜春期＞		＜秋期＞	
1	指導方針の説明、指導教員の研究紹介	1	秋期ガイダンスと研究計画の作成について
2	修士論文完成までのプロセスの説明	2	研究計画の検討①(研究計画ドラフト確認)
3	通年を通しての目標の設定	3	研究計画の検討②(問題点の抽出)
4	受講生の研究関心の発表①(研究関心の確認)	4	研究計画の検討③(研究計画の修正)
5	受講生の研究関心の発表②(関心領域の実現性の検討)	5	研究計画の検討④(倫理的検討と調査項目内容の検討)
6	文献検索指導	6	予備調査の計画①(調査方法と対象の確認)
7	研究テーマの検討①(課題の探索)	7	予備調査の計画②(調査項目に適合する質問項目の作成)
8	研究テーマの検討②(課題の特定)	8	予備調査実施①(調査実施、データ回収、データ入力法の確認)
9	研究テーマに関連した文献についての院生による発表と議論①	9	予備調査実施②(入力データの分析法の確認)
10	研究テーマに関連した文献についての発表と議論②	10	予備調査データの分析ならびに修士論文作成計画書の作成準備①(分析結果の確認)
11	研究テーマに関連した文献についての発表と議論③	11	予備調査データの分析ならびに修士論文作成計画書の作成準備②(分析結果から修士論文の方向性の確認)
12	文献の発表と議論を踏まえての研究テーマの絞り込み	12	予備調査の発表と議論①(本調査実施時の必要項目の検討)
13	テーマ絞り込みによる必要な文献の検討	13	予備調査の発表と議論②(本調査実施時の起こり得る問題の検討)
14	進捗の確認	14	中間発表に向けての研究計画の検討
15	春期のまとめ	15	全体的なまとめ

履修上の注意

最終的な目標は、修士論文の作成である。研究の社会的意義も意識しつつ、問題意識を常にもち、何を明らかにしたいのか、何を検証したいのかを明確にして、履修することを期待する。

評価方法

授業の積極的な参加度、発表時のレジュメ内容、発表、議論の程度ならびに日常の研究姿勢を総合的に評価する。

テキスト

必要な文献については、適宜紹介する。

授業概要

心理学の視点や理論を臨床にどう役立てられるかを意識し研究計画を立てられるよう指導する。詳細には、先行研究に関わる文献購読を行い、研究発表の仕方を学び、そして研究テーマを洗練していく。また、研究構想を練り、目的、方法の精緻化につながるよう指導する。前期では、関心領域に沿った文献検索の方法を知り、討論をしながら研究テーマを具体化させる。後期では、実際に予備実験・調査を実施できるよう指導する。

授業計画

到達目標

1. 各自の研究テーマに即した文献検索が適切にできる。
2. 各自の研究テーマを内外の先行研究と関連づけて、深めることができる。
3. 各自の研究テーマに即した方法論を展開できる。
4. 各自の研究テーマに即した研究計画を作成、実施することができる。
5. 各自の研究テーマについて、簡潔明瞭にプレゼンテーションを行うことができる。

<前期>		<後期>	
1	修士論文の作成に向けてのガイダンス	1	前期の振り返りと後期の目標
2	2年間のカリキュラムの見直し	2	研究構想の検討（1）
3	1年次の取り組みと目標	3	研究構想の検討（2）
4	研究課題の発表と課題（1）	4	構想発表事後指導
5	研究課題の発表と課題（2）	5	問題と目的の検討
6	文献検索とその方法	6	研究方法の検討（1）
7	先行研究論文の発表と討論（1）	7	研究方法の検討（2）
8	先行研究論文の発表と討論（2）	8	研究方法の検討（3）
9	先行研究論文の発表と討論（3）	9	研究方法の検討（4）
10	先行研究論文の発表と討論（4）	10	予備実験・調査の実施（1）
11	先行研究論文の発表と討論（5）	11	予備実験・調査の実施（2）
12	研究テーマの具体化と討論（1）	12	予備実験・調査のまとめ方
13	研究テーマの具体化と討論（2）	13	予備実験・調査の発表と課題（1）
14	研究テーマの具体化と討論（3）	14	予備実験・調査の発表と課題（2）
15	進捗状況・問題点の確認	15	本実験・調査に向けた問題点の整理（1）
16	前期のまとめ	16	本実験・調査に向けた問題点の整理（2）

履修上の注意

研究において学術的な意義を見出すとともに、社会にどのように貢献できるかについて問いを持ちながら取り組むこと。

評価方法

修士論文作成へ取り組む姿勢、意欲、態度に加えて、本実験・本調査のまとめ方によって評価する。

テキスト

適宜、必要に応じて紹介する。

授業概要

中間報告、中間発表などにおいて客観的評価を受け、同時に明らかにされた課題について誠実に向き合い、研究テーマにふさわしい解決を通して、より高度な研究活動を実践する。

予備調査、本調査などによって収集されたデータの適切な分析の方法と視点を確認、討論しながら、策定された研究課題の達成状況を確認し、より高度な修士論文の完成を目指した指導を行う。

授業計画

<前期>		<後期>	
1	修士論文作成プロセスに関する課題の確認	1	春期の振り返りと秋期の達成目標の確認
2	中間報告会に向けた研究課題の確認	2	中間報告会に向けた予行演習と討論（1）
3	中間報告会に向けた予行演習と討論（1）	3	中間報告会に向けた予行演習と討論（2）
4	中間報告会に向けた予行演習と討論（2）	4	中間報告会の振り返りと課題の確認
5	中間報告会に向けた予行演習と討論（3）	5	本調査の実施（1）実施依頼
6	中間発表の振り返りと課題の確認	6	本調査の実施（2）データの確認
7	本調査の設計（1）目的の確認	7	本調査の実施（3）結果の1次分析
8	本調査の設計（2）方法の確認	8	本調査の実施（4）結果の2次分析
9	本調査の設計（3）結果分析の確認	9	修士論文のプロット作成と検討
10	本調査の設計（4）倫理的検討	10	修士論文の作成：序論
11	研究倫理申請書の作成と確認	11	修士論文の作成：目的と方法
12	研究の進捗状況の確認（1）	12	修士論文の作成：結果分析と考察
13	研究の進捗状況の確認（2）	13	修士論文発表の予行演習（1）：プロット作
14	研究の進捗状況の確認（3）	14	修士論文発表の予行演習（2）：プロット修
15	春期のまとめ：進捗状況の中間総括	15	まとめと今後の課題の確認

到達目標

- (5) 各自の研究テーマに即した文献検索が適切にできる。
- (6) 各自の研究テーマを内外の先行研究と関連づけて、深めることができる。
- (7) 各自の研究テーマに即した方法論を展開できる。
- (8) 各自の研究テーマに即した研究計画を作成、実施することができる。
- (5) 各自の研究テーマについて、簡潔明瞭にプレゼンテーションを行うことができる。

履修上の注意

学術的意義とともに、人々の福祉に貢献するという問題意識を持って、主体的に研究に取り組むことが求められる。

特別課題研究は、2年にわたる修士論文完成を最終目標としている。そのためには日々の着実な課題への取り組みが必要であるが、そのためにも日々の心身の健康に留意することが求められる。

予習・復習

予定される課題を確実に仕上げ、終了後は、授業内容を反復し、修正を行うこと。

テキスト

論文作成への取り組みの姿勢、意欲、進展状況に加えて、論文の完成度、発表の態度によって評価する。

テキスト

研究内容、研究の進捗状況に応じて適宜紹介する。

授業概要

中間発表をおこない、他者からの評価・指摘・意見を踏まえて、研究計画および研究方法の再検討および修正をおこない、より高度な研究を目指す。

予備研究、本研究で収集した資料、データを分析し、その結果を目的・仮説と照らしながら、発表および討論を繰り返しながら考察を深めていく。自分の研究について、先行研究に対する研究成果と新たな知見、および、今後の課題を明確にし、修士論文の完成を目指して指導する。

授業計画

1. 中間発表を行い、質疑に対して適切に回答することができる。
2. 中間発表での意見や指摘を踏まえて、研究計画の精度を高めることができる。
3. 倫理的配慮を満たした上で、研究計画を実行することができる。
4. 得られた研究結果を適切に分析し、結果の解釈をおこない、論文としてまとめることができる。
5. 中間発表や修士論文発表において、自分の研究を適切にプレゼンテーションすることができる。

＜春期＞		＜秋期＞	
1	修士論文作成に関する総合ガイダンス	1	秋期ガイダンスと秋期の達成目標について
2	第1回中間発表に向けた研究計画の確認	2	本調査結果の分析と考察の討論①：分析結果
3	第1回中間発表のリハーサルと討論①：問題、目的、仮説の確認と修正	3	本調査結果の分析と考察の討論①：考察
4	第1回中間発表のリハーサルと討論②：分析方法、結果の予測、考察の視点の確認と修正	4	第2回中間発表のリハーサルと討論
5	第1回中間発表と質疑応答	5	第2回中間発表と質疑応答
6	本調査の研究計画の吟味①：問題と目的の確認	6	修士論文プロット作成
7	本調査の研究計画の吟味②：方法の確認	7	修士論文のプロットの修正
8	本調査の研究計画の吟味③：分析方法の確認	8	修士論文の原稿作成①：序論
9	本調査の研究計画の吟味④：倫理的配慮の検討	9	修士論文の原稿作成②：問題、目的、仮説、方法
10	研究進捗状況の中間総括	10	修士論文の原稿作成①：結果と考察
11	本調査の実施の報告①：実施状況や回収率の報告	11	修士論文の原稿作成①：全体の吟味
12	本調査の実施の報告②：データの確認と要約	12	修士論文発表のリハーサル①：プロットの作成
13	結果の分析①：素データ	13	修士論文発表のリハーサル②：プロットの修正
14	結果の分析②：分析モデル	14	修士論文発表と質疑応答
15	春期のまとめと研究進捗状況の確認	15	まとめと今後の課題の確認

履修上の注意

研究計画に沿って、地道に研究を進めること。研究を通じて、教育・福祉・医療おける現場の発展と課題の解決に貢献するという意識を常に念頭に置きながら、主体的かつ意欲的に研究活動に取り組むこと。

評価方法

修士論文作成へ取り組む姿勢、意欲、態度に加えて、完成した修士論文の完成度によって評価する。

テキスト

研究内容、研究の進捗状況に応じて紹介する。

授業概要

中間発表を行い、客観的評価・意見を受けて、明らかにされた課題を真摯に受け止め、研究計画及び研究方法を再検討し、解決策を考え、より洗練された研究へ高めることを目指す。

予備実験・調査、本実験・調査で得たデータや資料を基に、確認・発表と討論を重ねながら、研究課題の進捗達成状況を確認しつつ、洗練された内容の修士論文の完成を目指して指導を進める。

授業計画

<前期>		<後期>	
1	修士論文作成に関する総合ガイダンス	1	秋期ガイダンスと秋期の目標達成確認
2	第1回中間発表に向けた研究計画の確認	2	本実験・調査の分析①
3	第1回中間発表予行演習①問題仮説の修正確認	3	本実験・調査の分析②
4	第1回中間発表予行演習②方法の修正確認	4	本実験・調査の分析③
5	第1回中間発表予行演習③結果の予測と考察の視点確認	5	第2回中間発表予行演習①
6	第1回中間発表の振り返りと課題の確認	6	第2回中間発表予行演習②
7	研究計画の再確認①問題仮説の確認	7	第2回中間発表の振り返りと課題の確認
8	研究計画の再確認②方法の確認	8	修士論文原稿の目次の検討
9	研究計画の再確認③分析方法の確認	9	修士論文原稿の問題・目的の検討
10	研究計画の再確認④倫理的配慮の確認	10	修士論文原稿の結果の検討
11	本実験・調査の実施①	11	修士論文原稿の考察の検討
12	本実験・調査の実施②	12	修士論文発表会予行演習①
13	本実験・調査の実施③	13	修士論文発表会予行演習②
14	進捗状況の中間報告	14	修士論文発表と質疑応答
15	春期のまとめ	15	まとめと今後の課題の確認

到達目標

1. 研究テーマに即した適切な研究計画を立てることができる。
2. 中間発表を適切に行い、問題点や課題を客観的に把握できる。
3. 倫理的配慮の下、研究を実施できる。
4. 得られた研究結果をもとに、修士論文としてまとめることができる。
5. 修士論文として、簡潔・適切にプレゼンテーションすることができる。

履修上の注意

研究計画にしたがって、主体的・積極的に研究を進める。自身の研究が社会や人間に還元でき、公共の福祉に役立つものであることを常に考え、意欲的に取り組むこと。

予習・復習

研究発表の資料作成、本実験・本調査に向けた分析
発表後の問題点の整理と検討、本実験や本調査結果の分析

評価方法

授業態度として修士論文への取り組む主体的な姿勢や意欲 20%、完成した修士論文の内容 80%として、総合的に評価する。

テキスト

研究内容、進捗状況に応じて適宜紹介していく。

授業概要

修士論文作成に向けて、次のステップに沿って指導する。(1) 心理学研究の形式と方法に基づいて、本調査を実施する。(2) 研究目的に対応したデータ分析を行う。(3) 形式と内容を整えて、修士論文の執筆を行う。(4) 最終審査に向けたプレゼンテーションの準備を行う。(5) 最終審査での助言指導を踏まえて、最終提出に向けた修正を行う。(6) 調査結果希望者へのフィードバックを行う。

また、春期の第2回中間報告会の事前・事後指導を行う。

授業計画

<春期>		<秋期>	
1	本調査準備①	1	執筆/結論
2	本調査準備②	2	本文推敲・修正①
3	本調査準備③	3	本文推敲・修正②
4	本調査実施/データ分析①	4	本文推敲・修正③
5	本調査実施/データ分析②	5	本文推敲・修正④
6	本調査実施/データ分析③	6	本文推敲・修正⑤
7	本調査実施/データ分析④	7	最終審査準備①
8	執筆/目次、構成	8	最終審査準備②
9	執筆/序論①	9	最終提出のための修正①
10	執筆/序論②	10	最終提出のための修正②
11	執筆/目的	11	最終提出のための修正③
12	執筆/結果①	12	結果概要希望者への報告書作成①
13	執筆/結果②	13	結果概要希望者への報告書作成②
14	執筆/考察①	14	結果概要希望者への報告書作成③
15	執筆/考察②	15	抄録作成

到達目標

4. 予備的検討を踏まえた本調査計画の立案ができる。
5. 研究倫理を適正に遵守して、調査を実施することができる。
6. 研究目的に応じた適切な手法を用いてデータ分析を行うことができる。
7. 修士論文研究としての形式と内容を踏まえて、修士論文を作成できる。

履修上の注意

自ら主体的、積極的に取り組むこと。

予習・復習

予習：疑問点・討論点を整理する。
 復習：授業内での指導を踏まえて研究を進める。

評価方法

修士論文の完成度によって評価する。

テキスト

使用しない。必要な文献は適宜紹介する。

授業概要

中間発表において受けた指導により明らかになった課題の修正を行い、研究を発展させ、修士論文の到達点を決定し、データの収集を行う。次に、収集したデータの分析方法や、検討する現象の理論的な位置づけ等に関する最終的な確認を行い、修士論文を作成するよう指導する。

授業計画

到達目標

1. 研究課題を明確にし、課題に到達するための計画を立てることができる。
2. 研究課題を達成するための方法を検討し、実施することができる。
3. 研究課題に即した分析を実施し、修士論文を作成することができる。
4. 作成した修士論文に基づいて、明瞭簡潔にプレゼンテーションすることができる。

＜春期＞		＜秋期＞	
1	修士論文作成に向けた総合ガイダンス	1	秋期の達成目標に関するガイダンス
2	各自の研究計画の発表	2	各自の経過報告
3	第1回中間発表の発表練習（1）：研究目的と方法の確認	3	第2回中間発表の発表練習：グループ（1）
4	第1回中間発表の発表練習（2）：分析方法と結果の確認	4	第2回中間発表の発表練習：グループ（2）
5	中間発表の評価の吟味	5	中間発表の評価と分析方法や研究意義の調整
6	研究の方向性に関する最終的な確認	6	修士論文の現実的な到達点の吟味（1）：分析手法の確認
7	本調査の実施計画の発表と討議（1）：研究目的の吟味	7	修士論文の現実的な到達点の吟味（2）：分析結果の確認
8	本調査の実施計画の発表と討議（2）：研究方法の吟味	8	修士論文草稿の作成（1）：要約の作成
9	本調査の実施計画の発表と討議（3）：分析手法の吟味	9	修士論文草稿の作成（2）：問題と目的
10	本調査の実施計画の発表と討議（4）：結果の予測	10	修士論文草稿の作成（3）：方法と結果
11	本調査の実施（1）：倫理的配慮の確認	11	修士論文草稿の作成（4）：結果と考察
12	本調査の実施（2）：ローデータ取得と入力	12	修士論文発表の予行演習（1）：プレゼンテーション方法の確認
13	本調査の実施（3）：分析結果の報告	13	修士論文発表の予行演習（2）：全体の確認
14	研究進捗状況に関する総合的な評価	14	修士論文発表と質疑応答
15	春期のまとめ	15	修士論文のまとめ

履修上の注意

特別課題研究Ⅰで習得した修士論文作成のための方法論を駆使して、データ収集や分析等の実務的な学習が中心となる。課題作成に向けて、これまで以上に自発的な態度が求められる。

評価方法

研究課題への積極的な取り組み、およびその内容について評価する。

テキスト

適宜紹介する。

授業概要

年間を通しての指導、ならびに中間発表における指導によって明確になった課題を解決し、より高度な研究へと発展をさせる。予備調査、本調査を通して、調査の企画、実施から発表までの研究の全過程を専門的に高いレベルで経験させるようにする。研究の方向性を常に確認しつつ、調査方法や分析の視点の提示や議論を行うことによって、修士論文の完成を目標とした指導を行う。

授業計画

到達目標

- 1.研究課題に適合した研究計画が策定できる。
- 2.研究課題を解決するためのデータ解析を適切に処理できる。
- 3.高い論理的な構成力によって、論文を作成することができる。
- 4.修士論文について説得性・納得性の高い効果的なプレゼンテーションができる。

＜春期＞		＜秋期＞	
1	修士論文に関する総合ガイダンス	1	修士論文作成に向けてのガイダンス
2	研究計画の発表	2	本調査分析結果と考察の検討①（先行研究と結果の検討）
3	第1回中間発表予行演習①（発表内容の確認と修正）	3	本調査分析結果と考察の検討②（考察のシナリオの検討）
4	第1回中間発表予行演習②（内容確定）	4	第2回中間発表予行演習①（発表内容の確認と修正）
5	本調査の計画①（調査対象者、調査変数の確認）	5	第2回中間発表予行演習②（内容確定）
6	本調査の計画②（分析案作成；全体的な分析の流れ）	6	第2回中間発表評価を踏まえての議論
7	本調査の計画③（分析案作成；詳細分析案）	7	修士論文構成案（目次）の作成と議論
8	本調査の計画④（計画の修正）	8	修士論文草稿の作成①（序論）
9	本調査の実施と分析案修正①（詳細分析案の修正）	9	修士論文草稿の作成②（目的と方法）
10	本調査の実施と分析案修正②（詳細分析案確定）	10	修士論文草稿の作成③（結果）
11	本調査の分析結果の討論①（結果の検討）	11	修士論文草稿の作成④（考察）
12	本調査の分析結果の討論②（追加分析案の検討）	12	修士論文発表の予行演習①（発表内容の確認と修正）
13	本調査の分析結果の討論③（追加分析の検討）	13	修士論文発表の予行演習②（内容確定）
14	本調査の分析結果の討論④（考察に向けての討論）	14	修士論文発表と質疑応答
15	進捗確認と春期まとめ	15	修士論文の全体的なまとめと展望

履修上の注意

研究の学術的意義を意識し、社会的な貢献も考慮しつつ、主体的に研究の完成を目指すように努力することを期待する。

評価方法

出席、意見等の参加性の程度、発表会における発表の仕方、修士論文の完成度によって評価する。

テキスト

必要な参考文献は適宜、紹介する。

授業概要

中間発表に向けて予行演習を行い、効果的な発表スキルの習得を目指して指導する。また、中間発表を振り返り課題と向き合い、さらに研究計画を洗練させる。修士論文の執筆に向けて本実験・調査を実施し、統計的分析を行い、より一層考察を深められるよう指導する。得られた結果を討論し、本研究の意義を再度見直せるよう助言する。

授業計画

到達目標

1. 各自の研究テーマに即した文献検索が適切にできる。
2. 各自の研究テーマを内外の先行研究と関連づけて、深めることができる。
3. 各自の研究テーマに即した方法論を展開できる。
4. 各自の研究テーマに即した研究計画を作成、実施することができる。
5. 各自の研究テーマについて、簡潔明瞭にプレゼンテーションを行うことができる。

<前期>		<後期>	
1	修士論文の作成に向けてのガイダンス	1	修士論文の作成に向けてのガイダンス
2	第1回中間発表へ向けた研究計画と修正	2	結果のまとめ
3	第1回中間発表の予行演習(1)	3	結果のまとめと考察
4	第1回中間発表の予行演習(2)	4	第2回中間発表の予行演習(1)
5	第1回中間発表の予行演習(3)	5	第2回中間発表の予行演習(2)
6	中間発表の振り返りと課題の確認	6	第2回中間発表の予行演習(3)
7	本実験・調査の検討(1)	7	第2回中間発表の振り返りと課題の確認
8	本実験・調査の検討(2)	8	修士論文の執筆と討論(1) 目次・序論
9	本実験・調査の検討(3)	9	修士論文の執筆と討論(2) 問題・目的
10	本実験・調査の検討(4)	10	修士論文の執筆と討論(3) 方法
11	研究倫理申請書の作成	11	修士論文の執筆と討論(4) 結果
12	研究倫理申請書の確認	12	修士論文の執筆と討論(5) 考察
13	本実験・調査の実施(1)	13	修士論文発表の予行演習(1)
14	本実験・調査の実施(2)	14	修士論文発表の予行演習(2)
15	本実験・調査の実施(3)	15	修士論文発表と質疑応答
16	前期のまとめ	16	後期のまとめ

履修上の注意

研究において学術的な意義を見出すとともに、社会にどのように貢献できるかについて問いを持ちながら取り組むこと。

評価方法

修士論文作成へ取り組む姿勢、意欲、態度に加えて、修士論文の完成度によって評価する。

テキスト

適宜、必要に応じて紹介する。